

災害備え「不安」50%超

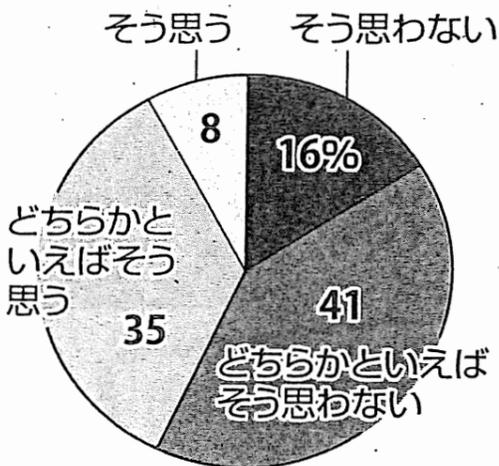
淑徳大 読売 ①

共同千葉県調査

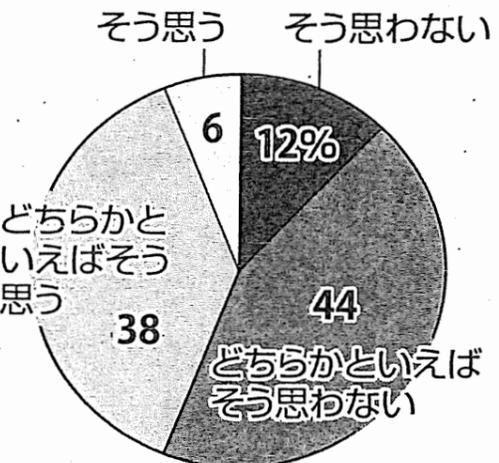
自宅や居住地で災害への備えに不安を感じている県民の割合が50%を超すことが、「淑徳大学・読売新聞共同千葉県調査」でわかった。備えで進むのは懐中電灯で、簡易トイレが遅れている。地震や台風への不安が強く、南房総・外房、香取・東総での不安が強い。

自分の家で自然災害への備えができていないかを尋ねる設問には、「そう思わない」が16・0%、「どちらかといえばそう思わない」は41・3%だった。57・3%が、災害への備えに不安を感じていることになる。

「どちらかといえば」も含め、備えができていないと思う人は42・7%。備えができていないとする人の方が約15%多かった。住んでいる地域で自然災害への備えができていないかを質



自分の家では災害への備えができていない



居住地では災害への備えができていない

※小数点以下は四捨五入

地震や台風 懸念強く

問したところ、「そう思わない」が12・1%、「どちらかといえばそう思わない」が43・9%で、56・0%が不安を抱えていることがわかった。「どちらかといえば」を含め、備えができていないと考える人は44・0%で、備えができていないとする人の方が12%上回っている。

災害別では、地震への不安が95・6%で最も高い。不安の程度は「非常に不安」(40・6%)、「かなり不安」(29・6%)、「やや不安」(25・4%)の順だ。次いで、台風への不安が92・1%と高い。強風への不安(89・6%)、豪雨・洪水への不安(86・0%)が続く。県内では2019年9月などに台風で甚大な被害を受けており、結果に影響した可能性もある。

津波に対する不安は60・5%、高潮への不安は53・0%だった。地域によってはらつきがあり、太平洋に面した南房総・外房ゾーンは津波への不安が85・9%、高潮への不安が74・5%で、他のゾーンに比べて突出して高い。内陸の印旛ゾーンはいずれも低く、津波への不安が44・4%、高潮への不安は39・9%だった。自分や家族による災害への

備えを複数回答で尋ねたところ、「懐中電灯の準備」(53・7%)が最多だった。「飲料水の備蓄」(50・4%)と「食糧の備蓄」(45・4%)が続いた。

「ラジオの準備」(32・7%)や「スマートフォンや携帯電話の電池切れ対策」(31・9%)、「簡易携帯トイレの準備」(20・1%)は低かった。

地域別では、印旛ゾーンが家具固定や飲料水備蓄で、内房ゾーンが食糧備蓄や暴風対策で、比較的進んでいる。南房総・外房ゾーン、香取・東総ゾーンは災害への不安が強いにもかかわらず、備えが十分に進んでいない。

共同調査 31年まで隔年で

淑徳大学と読売新聞千葉支局は2031年まで隔年で、「淑徳大学・読売新聞共同千葉県調査」(計5回)を実施する。第1回調査は23年10月26日～11月6日、県内に住む20歳以上の男女

を対象にインターネットで行い、5175人から回答を得た。

調査では、県内を県総合計画(22年3月)に沿って6ゾーン(①東葛・湾岸②印旛③内房④香取・東総⑤南房総・外房⑥九十九里)に区分。各ゾーンの性別・10歳刻み年齢層別の人口比に従い、対象者数を配分した。

主な調査内容は、①災害不安と災害への備え②犯罪不安③コロナ禍評価④孤独・孤立感⑤県内での居住継続意向——の5項目。本紙千葉県版で、項目別に調査結果を掲載していく。